



オーケストラ
アンサンブル・フリーEAST
第15回演奏会

2021年9月26日（日） 開場13:30 開演14:00

江戸川区総合文化センター 大ホール

ブラームス：悲劇的序曲 Op.81

ラフマニノフ：交響詩《死の島》 Op.29

高木 日向子：And now look!（委嘱作品/関東初演）

シベリウス：交響曲第5番 変ホ長調 Op.82

新型コロナウイルス感染症拡大防止のためのお願い

- ・入退場時、鑑賞中、休憩中のソーシャルディスタンスの保持にご協力ください。
- ・ブラボー等の発声はご遠慮ください。
- ・会場内でのマスクの着用、咳エチケット、手洗い、手指の消毒にご協力をお願い申し上げます。
- ・発熱や咳、呼吸困難感などの体調不良がある場合はご来場をお控えください。
- ・新型コロナウイルス接触確認アプリ（COCOA）の積極的なご利用をお願い申し上げます。
- ・感染者が発生した場合、チケット購入時にご入力いただいた氏名・連絡先等の情報を保健所等の公的機関に提供する場合があることをご了承ください。

挨拶

新作《And now look !》を作曲家の高木日向子さんに委嘱したのは 2020 年春のことでした。未だ新型コロナウイルスについて解明が進んでいなかった当時、「緊急事態宣言」は現在よりも更に大きな緊迫感を社会にもたらしていました。「不要不急」の言葉の下に大勢が集まるイベントは制限を余儀なくされ、多くの演奏会が中止となりました。

自らが歩んできた音楽の道を「不要不急」と断じられた音楽家の中には、経済的、精神的に大きな傷を負い、別の道を歩むことになった人も多くいると聞きます。高木さんは、この作品を作曲するにあたって、「どんな状況下にあっても音楽を続けていきたい、そのような決意の表れのような曲を書きたい」という強い意志を持って取り組んだと言います。その言葉通り、本作品はスネアドラム（=小太鼓）が常に逆境を跳ね返すような力強さで決然と鳴り響きます。

パンデミック発生以降続く様々な悲しい出来事、失われた尊い命に思いを馳せながら、どんなに辛く、厳しくとも負けない人間の意志の強さを示し、そしてシベリウスが描くような澄み渡った世界が現実のものとなるよう、祈りに代えて音楽を演奏いたします。私たちの演奏が、皆様の心に少しでも響くものとなれば幸いです。

アンサンブル・フリー EAST 代表 浅野 亮介

プロフィール

指揮：浅野 亮介 Ryosuke ASANO

神戸大学国際文化学部を経て同大学院博士課程前期課程修了。大学院では美学理論、作曲技法を学び、シェーンベルクを中心とした 20 世紀初頭のドイツ音楽を軸に、古典派からロマン派まで幅広く研究対象とする。

2000 年に関西一円からメンバーを集め、アマチュア・オーケストラ「アンサンブル・フリー」を設立。国内の優秀なソリストとの共演や 100 名を超える大規模な楽曲にも積極的に取り組み好評を博している。

2013 年には、より新しい音楽を開拓するため東京にて「アンサンブル・フリー EAST」を設立。毎回の演奏会で新作の委嘱・初演を行い、多くの演奏家、作曲家の支持を受けている。2019 年、アンサンブル・フリー第 30 回演奏会を機に関西のオーケストラを「アンサンブル・フリー WEST」と改称。「アンサンブル・フリー EAST」と合わせた東西「フリー」の活動を両輪として、従来のクラシック音楽から最新の現代音楽まで幅広く発信するために意欲的な演奏会を企画している。



作曲：高木 日向子 Hinako TAKAGI

1989 年生まれ、兵庫県出身。

兵庫県立西宮高等学校音楽科ピアノ専攻、大阪音楽大学作曲学科作曲専攻卒業。給付奨学金を得て、同大学院作曲研究室修了。

2017 年日本音楽コンクール作曲部門第 3 位（室内楽部門）。

2019 年ジュネーブ国際音楽コンクール作曲部門において、同率 1 位。

受賞作《L'instant》は 2020 年同音楽コンクールオーボエ部門の課題曲となる。

現在は、作曲活動に加えて、子供から大人まで幅広い世代に現代音楽を聴く楽しさを伝える活動も行っている。

大阪音楽大学非常勤講師、大阪音楽大学附属音楽院ソルフェージュ講師。



“——三月七日、ブラームスはウィーン・フィルハーモニー演奏会に出かける。これが公開演奏会に顔を出す最後の機会となった。
「(中略) 壮大な終楽章 [※1 ブラームス作曲 交響曲第四番] の後、大地を揺るがすような拍手がホールを満たした。(中略) これはおそらく、ブラームスがウィーンで経験した最大の勝利であった。そして、演奏会を訪れる最後の機会となったこの日以降、ブラームスは衰弱してしまった”。

——四月三日、ブラームス、ウィーンで死去。ウィーン中央墓地内の特別名誉区に最後の安息の場を得る。”(※2)

それは、友人や肉親の相次ぐ逝去ののち、ヨハネス・ブラームスが生涯をかけて敬愛したクララ・シューマンがとうとう世を去った翌年—— 1897 年のことだった。元々肝臓がん(※3)に侵されていたブラームスは、友人たちの死に触れつつ、自らの死も予感していたのかもしれない。今際の際に、彼は『11 のコラル前奏曲 Op.122』を作曲する。ブラームスにとっての白鳥の歌は、オルガン曲でありながら、11 曲すべてに付されたテキストにより、曲の性格が色濃く表されている。6 曲目よりテキストを以下引用する。

“「おお如何に幸いなるかな、信仰深き人々よ
何と聖なるかな、敬虔な者たちよ、
彼らは死をもって神のもとに來たれり。
私たちが今もとらえているすべての苦しみから
救い出したまえ。”(※4)

6 曲目に限らず、どの曲目も、死と信仰、あるいは現世の慰めがテーマとなっている。友人たちを亡くし、そして最も崇敬してやまないクララを亡くしたブラームスにとって、晩年 1897 年の景色は、どのような色合いを持っていたのだろうか。

器楽曲ながらテキストが与えられた『11 のコラル前奏曲』だが、必ずしもブラームスは自らの器楽曲にそのような具象を与えるわけではなかった。1880 年に作曲された『悲劇的序曲 Op.81』は、「悲劇」の名を冠しながらも、具体的なテキストがあったわけではなく、飽くまで同時期に作曲された『大学祝典序曲 Op.80』の対の双子として作曲された音楽だった(※5)。

とある大学からの委嘱作品である『大学祝典序曲』は、当時流行していた大学の学生歌や民謡を織り込んだ序曲となっている。ブラームスはこの曲を「愉快的(lustig)」音楽であると自ら述べつつ、その愉快さの“償い”として、また彼自身の気質に対する表現として『悲劇的序曲』を作曲したことを、出版者ジムロック宛の手紙に記した。

“ある機会のために、(中略) とても愉快的大学祝典序曲を書かなければなりませんでした。それに際して、私の持つメランコリーな気質に対して、もうひとつの悲劇のための序曲も書くという、償いをせざるを得ませんでした。”(※6)

ソナタ形式により作曲された『悲劇的序曲』では、各主題の色調が鮮やかに対照されている。Tutti による二短調の強奏により曲は始まり、第 1 主題は二短調のままメランコリックなメロディが奏でられる。その後変イ長調に転じたかと思うと、どこか懐かしさに胸がいっぱいになるような、へ長調の第 2 主題が演奏される。展開部はブラームスらしく濃密に激しく主題が展開され、再現部に戻りコーダ。最後は元々の二短調で曲が閉じられる。

皮肉屋でペシミストながら人への優しさに満ち溢れた、けれども頑固なブラームスを、そのまま表現したかのような曲調である。

そんな繊細な人となりを持ったブラームスの葬儀は、彼を慕う多くの友人知人に囲まれた、温かなものであったという。

“葬儀は四月六日におこなわれた。友人たちや知人たち、そしてウィーンの多くの人々に見送られて、ブラームスを乗せた霊柩車が墓地に向かった。車は途中、楽友協会に立ち寄り、そしてブラームスに向かって合唱団が、《さようなら》(作品九三 a 第四曲)を歌って別れを告げた。墓地に到着すると、告別の歌がうたわれて埋葬の儀が行われた。”(※7)

※1 かつこ 〓内は筆者注

※2 クリスティアン・マルティン・シュミット著 江口直光訳『ブラームスとその時代』西村書店

※3 実際には膀胱がんであったという説もある。

※4 小林みゆき著「J.Brahms のオルガン音楽 —11 のコラル前奏曲 op.122 を中心にして (その 2) —」『盛岡大学紀要 第 33 号』

※5 西原稔著『ブラームス』音楽之友社

※6 石川亮子著「解説」『大学祝典序曲 Op.80』全音楽譜出版社

※7 クリスティアン・マルティン・シュミット著 江口直光訳『ブラームスとその時代』西村書店

アーノルド・ベックリン作『死の島』のモノクロームの複製画を見たセルゲイ・ラフマニノフは、その絵から受けたインスピレーションを元に交響詩を作曲した。交響詩のタイトルは、元の絵から同名をもらい受け『死の島』と命名され、この曲は作曲同年の1909年にモスクワフィルハーモニー協会のコンサートで、作曲家自身の指揮によって初演された。

“もし、オリジナルを最初に見ていたら、おそらくは、私はこの『死者たちの島』を作曲しなかったでしょう。白黒の方が、この絵は私は好きです。”(※1)

ラフマニノフは後年にこの曲を回想してこう述べた。オリジナルの『死の島』は、明色を基調とした島と、濁りのある暗色で島を囲う空と海の対照が目を惹く絵画となっている。一方で、ラフマニノフが見た複製画は色を落としたモノクロ画であり、島と空と海は活気のない灰色に同化して、オリジナルの絵画とは違う表情を見せるものであった。

交響詩『死の島』は、不安定な8分の5拍子のリズムと、暗いチェロの導入により、極めて陰鬱に始まる。最初の導入部で演奏されるモチーフは、しばしば水面の動きや、海を漕ぐオールに例えられる(※2)。このモチーフは曲中執拗に用いられ、発展をしてゆく。

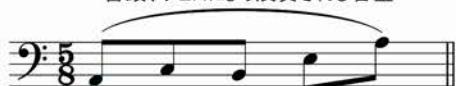


ベックリンが5作品描いた『死の島』のうちの1作品



ラフマニノフが見たであろうモノクロ画の『死の島』

冒頭、チェロにより演奏される音型



もう一つ、重要なモチーフがある。グレゴリオ聖歌『怒りの日(Dies Irae)』から引用されるフレーズである。グレゴリオ聖歌から断片的に採られたこのフレーズは、曲中幾度となく現れては消えてゆく。

『怒りの日』に関する断片的なモチーフの一例(曲中25小節目、ホルンの譜面より引用)



ラフマニノフは、『死の島』に限らず、他の楽曲でもグレゴリオ聖歌『怒りの日』からしばしばモチーフを引用している(例：『交響曲第2番』、『交響的舞曲』等)。他にも、著名な曲ではベルリオーズ『幻想交響曲』やリスト『死の舞踏』でこのモチーフが引用されているが、『怒りの日』はキリスト教における終末の日——世界が終わりを迎え、神が人々を審判し、行いが認められたものには永遠のいのちと平安を、そうでないものには永遠の責め苦を与える日——を表象する聖歌となっている。

ラフマニノフは、実際にはグレゴリオ聖歌のテキストを詳細に把握しているわけではなかったようであるが(※4)、死にまつわるモチーフであることは把握していたようで、『死の島』以外には現世と死をテーマにしているゲーテ著『ファウスト』にインスピレーションを受けて作曲された『ピアノソナタ第1番』でも、『怒りの日』に関するモチーフが利用されている(※5)。

短調を主とする陰鬱な曲の中であって、4分の3拍子で演奏される中間部では長調の幻想的なメロディが演奏される。この箇所については、ラフマニノフは「絵」で表現されていない独自の補足であることを付け足しつつ、

“この主題は、残りのすべてのものと大きなコントラストをなされなければなりません。これをより速く、より神経質に、より感情をこめて演奏する必要があります。(中略)ですから、コントラストが非常に必要なのです。最初は、死、それから生なのです。”(※5)

「生」を表現する中間部は再出した『怒りの日』のフレーズに飲まれ、最後には破局的な和音で終わりを迎える。その後、『怒りの日』のモチーフが複数の楽器によって幾度と演奏された後、8分の5拍子のコーダが始まる。曲の冒頭と同じ、チェロを主体とした不安定なリズムが導き手となり、最後には完全な形でチェロにより演奏される『怒りの日』によって曲が結ばれる。



※1 C.I. ソコロワ著, 佐藤康彦訳『新装版 ラフマニノフ その作品と生涯』新読書社

※2 Timothy Judd "Rachmaninov's "Isle of the Dead": A Tone Poem in Black and White",

<https://thelistenersclub.com/2019/09/18/rachmaninovs-isle-of-the-dead-a-tone-poem-in-black-and-white/>.

※3 増田桃香 「S. ラフマニノフのピアノ作品におけるロシア正教聖歌の要素 —ロシア正教聖歌の変遷と《徹夜禱》作品 37 からみるラフマニノフの一音楽書法—」, 『東京藝術大学博士論文』

※4 山野昭正「S. ラフマニノフの作曲技法に関する研究」, 『兵庫教育大学修士論文』

※5 C.I. ソコロワ著, 佐藤康彦訳『新装版 ラフマニノフ その作品と生涯』新読書社

吉田 良平

高木 日向子：And now look!(委嘱作品 / 関東初演)

“Right here, right now is where we draw the line.

The world is waking up. And change is coming, whether you like it or not.”

《私たちは、今この瞬間から、ここに線を引きます。

世界は目覚めています。そして、あなたが好もうと好まざるとも、変化はやってきています。》

これは、当時 16 歳だった環境活動家、グレタ・トゥンベリが 2019 年 9 月に国連本部で訴えかけたスピーチの最後の一文です。このスピーチは当時、世界中のメディアに取り上げられ、話題になりました。グレタの言うように、ここ数年の気候変動を鑑みると、確かに私たちは生活を変化させなければいけないのは明白ですが、経済を止めれば、今までの生活水準を維持できなくなります。人々の反応は、この対立のどちらかに属するか、メディアを通して双方をただ静観するかの三様に分かれたように思います。

このスピーチの約半年後、新型コロナウイルスの感染拡大によって、世界はあらゆる活動の制限を強いられるようになり、この“私たちが好もうと好まざろうが、変化が訪れている” という一文は、図らずも予言的なものとなりました。このグレタのスピーチに対する、チェコの経済学者、トマス・セドラチェックの指摘が、とても印象的でした。

“And now look!

We did not do it for the environment, but to save lives.”

《そして、今ほら！

環境のためにはできなかったけど、命を救うためならできたじゃないか！》

この曲の構想を練りだしたのは、ちょうど日本が緊急事態宣言下にあった頃で、音楽家の私にとっては、様々な制限の中でも、特に演奏会が軒並み中止になるということが異常事態でした。それでも、どんな状況下にあっても音楽を続けていたい、そのような決意の表れのような曲を書きたいと思いました。

高木 日向子

シ ベリウス：交響曲第 5 番 変ホ長調 Op.82

森と湖の国と呼ばれるフィンランドで生まれたジャン・シベリウス(1865-1957)は、フィンランドの古代伝説や、自然、歴史からインスピレーションを受けた作品を多く残しています。

『交響曲第 5 番』は、1915 年にシベリウスの生誕 50 周年にあたる祝賀演奏会で自身の指揮により初演され、その後、4 年をかけて大きく改訂されました。固定的なイメージを持って書かれたテーマの存在や、物語性を感じる独特な音楽構成は標題音楽的であり、また、特に第 1 楽章で見受けられるモチーフの巧みな展開からは絶対音楽的な側面が感じられ、ロマン派音楽の叡智が交響曲という枠組みに結集されたと言える作品です。

当時のフィンランド情勢は、1914 年から 1918 年には第一次世界大戦が繰り広げられ、その間 1917 年にフィンランドは独立を勝ち取っています。また、同時に音楽も転換期を迎え、ドビュッシーの交響詩『海』(1903-1905)や、ストラヴィンスキーの『火の鳥』(1910)のような 20 世紀音楽の潮流が、後期ロマン派音楽よりも強くなっていました。このような背景から、この作品には、2 つの意味で激動の時代を生き抜いた、シベリウスの心情やメッセージが見え隠れしているような気がしてなりません。

第 1 楽章

ホルンの牧歌的な音色がテーマを提示します。冒頭の 4 音のモチーフは、全体を通して、あらゆる変容が加えられながら発展していきます。テンポは *molto moderato* から、徐々にエネルギーが増幅し、最終的に *Più Presto* に向かいます。一つの小さな種子から芽が出て、茎が枝分かれしながら太陽の光に向かって成長する過程を想起させるような音楽です。

第 2 楽章

フルートが奏でるテーマを弦のピチカートが引き継ぎ、その後も会話的に音楽が発展していきます。*Andante mosso, quasi allegretto* で開始されるテンポは、第 1 楽章のような大きな変化はなく、終始穏やかです。

第 3 楽章

弦のトレモロによる快速なパッセージにより開始されます。中盤では、シベリウスが白鳥の鳴き声から着想を得たとされる雄大なテーマがホルンによって提示され、カノンのように発展します。その後、冒頭のトレモロでパッセージが、弱音器を付けた弦楽器によって回歸し、再度白鳥のテーマを、トランペットが *nobile*(気品を持って)という指示のもと演奏します。テンポは第 1 楽章とは対照的に、冒頭の *Allegro molto* からクライマックスにかけて、徐々に減衰していきます。最後は、長休符を伴う 6 つの和音の連打によって終了しますが、美しい白鳥のテーマの後に突然現れる間、響きの余韻は神々しく、天国に導かれたように音楽が締めくくられます。

高木 日向子

次回公演のご案内

アンサンブル・フリー WEST 第 33 回演奏会 (関西)

2021 年 11 月 28 日 (日) 14 時開演

住友生命いずみホール

バッハ (ラフ編曲)：シャコンヌ 管弦楽版

ヒンデミット：交響曲《画家マティス》

ブラームス：交響曲第 4 番 変ホ短調 Op.98

アンサンブル・フリー EAST 第 16 回演奏会 (東京)

2022 年 3 月 13 日 (日) 昼公演

ティアラこうとう 大ホール

委嘱作曲家：桑原ゆう / 琵琶独奏：久保田 晶子

曲目：未定

※どちらの演奏会も、感染症の状況によっては中止や延期になる場合があります。

アンサンブル・フリー EAST お問い合わせ

Tel：090-6044-1882 (事務局)

Facebook：EnFreeEast

E-mail：efree.east@gmail.com

Twitter：@Ens_FreeEast

Web：https://ensemblefree.jp/

Instagram：@ens_freeeast